兩晉三秦のアビダルマ教學（上）

——前秦のアビダルマ教學——

春日井眞也

はしがき
一、罽賓毘曇の受容
二、譯場の社會的狀況
三、佛教思想の定着
前秦に於ける外來のアビダルマ學人
一、曇摩持　二、曇摩蜱
三、鳩摩羅佛提　四、曇摩難提
五、僧伽跋澄　六、佛圖羅刹
七、僧伽提婆
あとがき

はしがき

西東兩晉及び前後西の三秦の時代と地域を通じ、毘曇の研學は三秦に盛行を見てゐる。

西晉時代に於て譯經に活躍する著名なる沙門十五人のうち毘曇に關係あるものは一人も無い。東晉に於ては十七人のうち法顯の雜阿毘曇心[1]の一例に過ぎない。

前秦時代四十四年の間に於て七人の譯經沙門のうち、毘曇に關係あるものとして鳩摩羅佛提、僧伽跋澄、曇摩蜱、僧伽提婆、佛圖羅刹、曇摩難提の六人を數へる事が出來る。これを承けた後秦に於ては、新來の譯經沙門五人のうちから、更に鳩摩羅什、曇摩耶舍の二人を加へる事が出來る。これに繼いだ西秦に於ては新らしい加入は認められない。

この事は後漢、魏呉の時代に於ける佛教の性格が南北に於て異つたにも拘らず、アビダルマ受容といふ佛教的な教學を通じて、共通に特殊な精彩を輝かす連峰を形成するものであると云ふことが出來る。

註 ① 開元錄卷三には（大五五・頁五〇七中）符秦僧伽提婆の所出と同本となし法顯譯を第二譯となしてゐる。これは鳩摩羅跋提の阿毘曇心が第一譯であり、僧伽提婆の阿毘曇心十六卷が第二譯であり、法顯譯十三卷はこの故に第三譯と考へるべきである。

一

西晉の末に北地には八王の亂があり、五胡の侵入があつて、十六國の興亡があつた。かかる政治的な背景の上に生活した漢族及び漢族以外の兩社會に受容せられた佛教文化の存在規定が、共通して毘曇への關心といふことであつたとすると、此の時代を分析することから、佛教思想のシナ思想征服の場面が考へられる事になる。

西晋以來やうやく一般社會に受容せられるに至つた佛教は、シナ佛教初期の指導者であつた安世高が毘曇と禪觀に長じてゐた影響の下に、一般には「禪數の學」と稱する事が出來る。佛教で云ふ數[1]とは毘曇學であつて佛教基礎學であつた。而も前秦に於て輸入せられつつあつた毘曇學は、輸入者であつた罽賓沙門の教養を通じて、遠く印度に於ける自由進歩的なガンダーラ學派に連るものであつた。

それ迄の佛教は老莊思想家と一脈相通ずる意味で、特に興味の中心となつた般若皆空思想の種々[2]の形態による研究が、佛教への關心を指導してゐたし、またこの後には佛圖澄（AD 二三二—三四八）の如く神異勝れ而も戒行嚴肅なる指導者を中心として佛教の盛衰起伏があつて新分野を開拓したのではあるけれども、一般的に云つてシナ的立場に於て理解せんとした風潮にむかへられた佛教であつたと云へる。やがて羅什が長安に至る（AD 四〇一）のである。この頃に法華經、華嚴經、涅槃經などの傳譯があつて佛教の重要思想が整ふと共に、羅什を中心とする研究講學が從來のシナ佛教の面目を一新するに至るのである。茲に於ては佛教の教理そのものの理解と俱に、やがて思想的にも屈折語文化圏と孤立語文化圏の文化交流の方途に關する根本問題への思索[3]を生むに至るのである。かくの如くして佛教思想のシナ思想的理解の段階を脱却して、佛教思想による佛教性の主張を形成する初期思想の萠芽をなすものが、ガンダーラ學派の阿毘達磨受用であつた事は興味ある事と云はねばならぬ。

註 ① 出三藏記集卷一〇所收の十法句義經序（道安撰）（大正五五・七〇上）には左の文がある。
阿含は數の藏府・阿毘曇は數の苑藪、舟を造りて濟るものは其の體や安し、數を粹にして立つるものは其の業や美し。
② 僧肇——不眞空論の三說、（本無義・心無義・即色義）　曇濟——七宗論の七說、など。
③ 吳の維祇難（Vighna）はインド思想をシナ思想の中に移植する場合「義に依りて、飾を用ひず」（出三藏記集卷七所收法句經序大五五・頁五〇上）といふに過ぎなかつた。道安に至ると五失本三不易の說（出三藏記集卷八所收、摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序、大五五頁五二、中、下）を立てて、梵文の配列とシナ文の配列の順序を比較すると倒であることなどの項目

を採擇して譯經に於て移植されるインド思想の本體を捕へんとした。

又彥琮による八備十條、玄奘による五種不翻、ならびに贊寧（宋高僧傳）による整理などを併せて、この問題は別稿に考究したい　拙稿經典史學の方法論――同志社大學文化史學發表豫定

二

西晉の時にはその都である洛陽に四十二寺であつた佛教は、北魏の末ごろに至ると洛陽だけで千三百六十七寺を數へた。この寺院に居住する僧侶の數に至つては實に二百萬に達することになるのである。この事は江北の佛教が五胡の何れの君主によつても信仰されたばかりでなく、政治的・經濟的に保護せられた事にもよるものである。これは五胡による佛教利用を手段とする文化政策とも見ることが出來る。かかる事情の間に佛教は社會の動亂に拘らず比較的安定して講學に專念し得た樣であるが、しかし戰亂は民心の安定を妨げ、惹いてはやはり戰亂から佛教教團の安定が確保せられて居らない樣に思はれる。直接にかかる生活環境を傳へる資料は多くないが、出三藏記集の中からも二三の例を指摘出來る。

會々燕秦交戰し關中大いに亂る。是に於て良匠背世す。（中阿鋡經序）①

此の年（建元二十（AD三八四）年）中阿含六十卷、增一阿含四十六卷を出だせり。伐鼓擊析の中に而も斯の百五卷を出だす。窮通するも其の恬を改めざるは詎んぞ先師の故迹に非ざらんや。（僧伽羅刹經序）②

晉の隆安元年（AD三九七）丁酉の歲……中阿鋡を出せり。……來の二年（AD三九八）戊戌の歲……草木始めて訖れり。……時に國の大難に遇ひ、未だ卽ち正書せず。乃ち五年（AD四〇一）辛丑の歲に至りて方に正寫校定して流傳することを得たり。（中阿鋡經序）③

このうち良匠背世といふことは道安の示寂を意味するとせられる。その死はAD三八五年である。建元二十年（AD三八四）は罽賓沙門僧伽跋澄が僧伽羅刹經を齎らして長安に到着した年であつた。この時慕容沖は長安を攻めたのである。これは慕容[4]の難（僧伽羅刹經序）とも阿城[5]の役（增一阿含序）とも云ふ樣である。而もこの中に於て譯經を中止せなかつた事は道安の老年に輝いた熱情であると見る事が出來る。

この時期はまことに政治史としては波瀾萬丈の時代と云へる。AD三七〇年既に關中・河南・河北・山東の地を併せた符堅は、一方に於て巴・蜀を攻略すると共に、前凉を河西に伐つて二正面に作戰を行つてゐた。AD三七六年前凉を亡ぼし一應の成果を收めた後AD三八二年になると九月には、符堅はこの年國師鳩摩羅跋提と俱に長安に來てゐた正車師前部王彌第と將軍呂光に命じて遠く兵を龜茲及び焉耆の西域諸國に押し進めてゐた。そして國力の莫大な負擔力が養はれてゐない內に、無計畫に志の趣くままに江淮の地に兵を進めることになつた。この事はAD三七九年神異一世に高名であつた佛圖澄に相對した道安を習鑿齒と俱に襄陽より獲て、長安に伴ひ歸り得たところに湧いた必勝の信念とも云ふべきものを持つてゐたからであると思はれる。しかしAD三八三年符堅は自ら率いた兵六十萬、騎二十七萬の主力を以て晉の謝玄の八萬と淝水に戰ひ潰滅的打擊をうけ、僅に身を以て免れる事になるのである。恰もこの年には長安に於ては遠來の罽賓沙門僧伽提婆を中心に竺佛念・慧力・僧茂・法和などの努力によつて、罽賓毘曇の最も重要な論書である八犍度阿毘曇が譯出されてゐたのであつた。

註 ① 出三藏記集卷九所收　中阿銜經序（道慈撰）大五五、頁六三下

② 出三藏記集卷十所收　僧伽羅刹經序　大五五、頁七一中

これは未詳作者なるも、文中の構成上道安撰と推定出來る。

③ 出三藏記集卷九所收　中阿銜經序（道慈撰）大五五、頁六四上

④ 大五五、頁七一中
⑤ 大五五、頁六四中

三

符堅はこの後幾ならずして叛に倒れ、後嗣も戮され、AD三九四年に前秦は遂に亡ぶのである。符健帝を稱して四十四年である。これに代つて關中を治めたものが羌族の出身である姚萇である。一方江北に戰塵風を捲いてゐるAD三八四年には、襄陽に於て道安と別れて六年の流亡を續けた慧遠は、遂に廬山に入ることになるのである。これは同學慧永がこの山の西林寺に居つた緣故にも連るのであるが、慧遠は山中に東林寺を建てて住んだと云はれる。爾來三十餘年出山すること無しとも云はれる外に、長安を擯出せられた佛馱跋陀羅とその弟子慧觀などの四十餘人を招いて、達磨多羅禪經を譯さしめたと云はれる。符堅の保護下に佛教興隆の活動をするのではなくて、秀麗の山陰に幽居しつつ沙門の權威を高調した慧遠を中心とする廬山の教學は江南の佛教の中心を形成するに至るのである。慧遠をして社會的な活動を可能ならしめた思想的な背景は、慧遠の感化力もさること乍ら、江南經濟力の確立と文化的な優越を思はねばならない。

太守桓伊による東林寺建立は別としても、中阿含經記に引く隆安元年（AD三九七）に於ける晉國の大長者東亭侯王元琳の記事の外に、華嚴經記に引く元熙二年（AD四二〇）に於ける吳郡內史孟顗・右衛將軍褚叔度などが、譯經事業に献金する事は、經濟力の確立によつて眼覺め來る社會的自覺を意味するものと云ふ事が出來る。廬山に於ける蓮華漏を初めとする文化的水準は、確かに當代名流の間に重んぜられたばかりではなく、儒道二教とともに理解せられる江南佛教の性格の上に於て、確かに指導的な役割を果してゐたと云ふ事を知り得るのである。

符秦に代つて關中の支配者となつた姚秦も、また佛教を厚く敬つてゐたが、その後三十四年萇の孫泓は長安に於て劉

裕に降りAD四一七年に亡ぶのである。しかし姚萇の子姚興が位につくや直ちに東に向つて河南を収め、次いで西の方西秦を從へ後凉を滅ぼし（AD四〇三年）、南凉・北凉・西凉の諸國の朝貢を得て江北を統一した如く見られた。この時期には佛教行事が盛に行はれた如くであつて高僧傳③僧伽提婆の部にその事が見えてゐる。これはやはり一時的盛況に止まつて、赫連勃々の叛を機として急速に衰へるのである。

かくの如き政治的狀況の不安な時期に於て、江北の譯場の事務處理は決して良好ではなく、江南に亂を避けた學匠達の佛教活動のすべては、個人的な經濟的支持によつて僅かに維持せられて來たと云ふ事が出來る。

符秦の末期動亂の中に示寂した道安は、長安に七年を過し講經・註釋・校正・跋序のほか譯經目錄を作り、空前の功績を擧げると俱に道俗を德化した。道安には禪觀と淨土往生と兜率上昇との實修鼓吹があつたうちで、兜率上昇は彼の撰と見られる婆須密集序に出づる罽賓國卽ちガンダーラに於ける彌勒崇拜の系統のものであると云ふことが出來る。

長安に於ける佛教理念の移植と佛教教學の研究は、かかる亂裡に着々と行はれたのであるけれども、修道者の意圖はやはり現世の煩を避けて、僧伽提婆の如く廬山に入らざるを得なかつたものと思はれる。然し廬山に於ける翻譯事業が、慧遠の下に於ける佛陀跋陀羅などを始めとして見るべきものの少いのは、④王元琳の如き檀越の支持が永續せなかつた事によるものと察せられる。しかし廬山は建康と並んで當時に於ても江南佛教の中心となつてゐたのみでなく、新文化の淵叢としての長安文化と直結した別世界を形成してゐた感がある。

註 ① 大正五五、頁六四上

② 大正五五、頁六一上

③ 慧皎：――高僧傳卷一　頃之して姚興秦に王として、法事甚だ盛なり。是に於て法和關に入り、提婆江を渡る。大五〇、頁三二九上

④ 晉國の大長者、東亭侯王元琳、檀越として精舍を造立し、釋慧持等義學沙門四十餘人を延請す、中阿含經記、（出三藏記集卷九所收　中阿鋡經序　所引）大五五、頁六四上

前秦に於ける外來のアビダルマ学人

一

曇摩持は法慧又は法海と譯され①西域三藏律師曇摩持と稱せられる。西域の人で律藏の學者であつた。彼も又アビダルマを誦したことが傳へられる。出三藏記集卷十一に引く比丘大戒序は道安の作るところであるが、それに次の文がある。

②余（道安）、昔、鄴に在りて少しく其の事を習ひしも、未だ戒を檢するに及ばざるに、遂に世亂に遇ひ、毎に以て怏怏として此を盡さず、歲、鶉火（庚午 AD 三七〇）に在るに至つて、襄陽より關右（長安）に至り、外國の道人曇摩侍の阿毘曇を諷し、律に於て特に善きに見え、遂に凉州の沙門竺佛念をして其の梵文を寫し、道賢をして譯を爲し、慧常をして筆受せしめ、夏を經、漸く冬にして乃ち訖れり。

ここに云ふ曇摩侍は曇摩持のことである。この文は比丘大戒であるが、これに合して比丘尼大戒があつた。③出三藏記集には比丘尼戒本所出本末序がある。それによるとこの比丘尼大戒は僧純なるものが拘夷國より得來つて、佛念・曇摩持・慧常をして傳へしむるに賴りて、始めて斯の一部の法を具ふるを得たりと傳へられる。比丘尼大戒が拘夷國卽ち龜茲國の戒本であつたが、比丘大戒がこれと同一系統のものであつたことは、その尸叉罰頼尼（çikṣā-karaṇīya＝衆學法）の項目が一致して④百十事であつたといふことから推して知ることが出來る。このことから曇摩持は龜茲國の佛教者であつた事が知り得られる。ここに觸れた衆學法に百十事ありといふことは現存戒本のいづれにも合せないところであるし、

これと合して龜茲國のアビダルマ學の情況については別に考へたい。

註 ① 歷代三寶紀 卷八、大四九、頁七五中

② 出三藏記集 卷十一、大五五、頁八〇中

③ 出三藏記集 卷十一所收、大五五、頁七九下—八〇上

④ 外國に云ふ「戒に七篇有り」と。而も前出の戒は皆八篇なり。今の戒は七悔過の後を尸叉羅頼尼と曰ひ、尸叉羅頼尼には百七の事を明かす有り。斯の如く則ち七篇なり。又、尸叉羅頼尼に百一十事有りと傳ふ。余（道安）、其の多きを慊ふに、〔曇摩〕持曰く。「我れ持律〔者の〕許にて十事を口授するも、一も記して長きこと無し」と。尋いで僧純、丘慈國に在りて佛陀舌彌の許にて比丘尼大戒を得、來りて之を出だせしに、正に〔曇摩〕持のものと同じく、百有一十あり。爾らば乃ち其の審かなるも、多からざることを知る。然らば則ち比丘戒は二百五十に止まらず、阿夷戒は五百に止まらざるなり。

二

曇摩蜱（Dharma-priya）は法愛と譯される。印度の人と傳へられる。建元十八年（AD 三八二）、車師前部王彌第の來朝に際して献ぜられた胡本大品一部四百二牒言二萬首盧の摩訶鉢羅若波羅蜜經抄の譯場に在つた人とされる。このときは譯者の佛護卽ち佛圖羅刹（Buddha-raksa）、筆受の慧進及び道安の努力によつて、竺法護及び無叉羅による放光・光讚の兩般若と對校して、失漏が補はれたと云はれる。曇摩蜱はこの記事から見るとき建元十八年より少し前から既に長安に居り、佛護・道安と交つて長安佛教界に於て相當尊敬されてゐた人でなければならぬ事になる。これに合する如く

①八犍度阿毘曇根犍度後別記に

近ごろ罽賓沙門曇摩卑あり、之を闇んじて來つて密川を經。僧伽禘婆、此の品を譯出して八犍度の文具はれり

といふ記事がある。ここに云ふ曇摩卑は曇摩蜱と同一人であるとして良い樣であるし、印度の人とは正しくは罽賓卽ち

當時の犍馱羅を意味するものである。八犍度論三十卷は建元十九年に僧伽提婆・竺佛念・慧力・僧茂・法和・道安等により成つたものであるから、建元十八・十九年頃に曇摩蜱は長安に於て活躍したものであろう。しかし根犍度後別記は泰元十五年（AD 三九〇）[2]揚州の瓦官寺に於て佛圖が記した事になつてゐる。この佛圖とは詳しくは佛圖羅刹卽ち佛護であろうと思はれる。僧伽提婆が根犍度因緣品を譯出したところは揚州瓦官寺であるとするとき、これを誦出した曇摩蜱もその頃には揚州に在つたものと考へてよいであろう。道安の死（AD 三八五）に續いた長安の政治的不安を反映して、續々南遷した龍象としての佛護ならびに僧伽提婆の影に、この曇摩蜱を數へる事が出來る。そして罽賓毘曇の學人であつた僧伽提婆の忘れたるを補つた曇摩蜱の佛教的教養は、前秦毘曇の學人の一人として忘れる事の出來ない人で云はねばならない。

註 ① 阿毘曇八犍度論　卷二十四後記　大二六、頁八八七上
出三藏記集　卷十所收　大五五、頁七三中

② 八犍度論卷二四後記のものは建元十五年に作るは誤である。又、記末の一行に揚州正官佛圖記とするは瓦官の誤である。この何れも出三藏記集所收の方が正確である。

三

鳩摩羅佛提（Kumārabhadra）は童覺と譯される。西域の人と傳へられるが何處か判然とはせない。彼は建元十八年（AD 三八二）、鄴寺に於て[1]阿含暮抄を譯したと云ふ。佛提自ら梵本を執り、佛念・佛護が譯出し、僧導・僧叡及び曇究が筆受した事になつてゐる。佛提は道安の[2]摩訶鉢若波羅蜜經抄序によれば、車師前部卽ち Turfan の國師であつて王なる彌第と俱に來朝した事が知られてゐる鳩摩羅跋提と同一人であるから吐魯番附近に於て極めて尊敬されてゐた人の樣である。しかしその佛教的教養については問題がある。

道安の筆になる③鼻奈耶序によれば、壬午のとし鳩摩羅佛提が道安の渇仰久しかりし阿毘曇抄・四阿含抄を齎らして長安に至つたことが語られてゐる。壬午はAD三八二年である。鼻奈耶序によれば其の夏に阿毘曇抄四卷、其の冬に四阿含抄四卷を譯出したことが知られる。鳩摩羅佛提は車師前部王と俱に來朝して獻じた胡本の大品一部四百二牒言二萬首盧なる摩訶鉢羅若波羅蜜經抄の翻譯に當つては譯場に參加してゐない。④そこでは天竺沙門曇摩蜱胡本を執り、佛護譯人と爲り、慧進筆受となつて放光・光讃の前譯と對校したのである。かかる事情を以て判斷すれば、鳩摩羅佛提は長安に至る少し前に外國沙門因提麗（Indra）の齎らした四阿鋡暮抄についても、特別な理解を有してゐた樣には考へられない。彼の佛教的教養は、學問的には、當時の佛教界の一般的風潮であつたところの阿毘曇に止まつてゐたと考へてよい。

彼は、⑤四阿鋡暮抄序によれば、壬午（AD三八二年）夏阿毘曇を出した。この阿毘曇とは⑥鼻奈耶序によれば、阿毘曇抄四卷である事が知られる。しかしこの阿毘曇抄四卷譯出の經緯については資料が無い。彼の阿毘曇抄に附隨して作者未詳の⑦阿毘曇心序に

釋〔道安〕和尚、昔、關中に在りて鳩摩羅跋提をして此の經を出ださしむ。其の人、晉語に閑はず。偈本は譯し難きを以て、遂に隱れて傳はらず。斷章に至りて直に修妬路と云ふ。〔僧伽〕提婆を見るに及んで、乃ち此の偈有るを知り、偈を以て前の所出を檢するに、又、多く首尾隱没して互に相涉入し、譯人の傳ふる能はざる所のもの彬彬然たり。此を以て勸めて更めて出さしむ。

と出てゐる。道安が長安に活躍したのは建元十五年（AD三七九）—建元二十一年（AD三八五）二月の間であるから、前記阿毘曇心序に出づる僧伽提婆の潯陽に於ける阿毘曇心の譯出の年代である泰元十六年（AD三九一）と較べると、十年近い年數がある事になる。この時代に於て動亂の中に十年近く隔ることはすべての混亂を生むもとになる。鳩摩羅跋提に阿毘曇心の譯出が無かつたとは云へぬにしても、卷數も傳へられず、進んで考へれば阿毘曇抄四卷と同本異名を考へ

得るところのこの阿毘曇心については、僧伽提婆譯阿毘曇心に附せられた現存の序だけを以てしては、解決に導くことは困難である。

註 ① 開元錄卷三　大五五、頁五一〇下
② 出三藏記集卷八所收　大五五、頁五二中
③ 大二四、頁八五一上
④ 出三藏記集卷八所收　摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序　大五五、頁五二中
⑤ 出三藏記集卷九所收　大五五、頁六四下
⑥ 大二四、頁八五一上
⑦ 出三藏記集卷十所收　大五五、頁七二中

四

曇摩難提（Dharma-nandin）は法喜と譯される。兜佉勒 Tukhāra 卽ち月氏國の人で三藏に通じ、特に中阿含及び增一阿含を誦した學者であつた。彼が遠く流砂を冒して東遊したものは一に符秦の佛教優遇の名聲に惹かれたものと思はれる。この時には未だ四阿含が傳へられてゐなかつたからして、中阿鋡經五十九卷・增一阿鋡經五十卷を誦出した。時もよし建元二十年（AD 三八四）道安と趙政との努力によつて、長安に義學の僧を集めて二阿含の寫出の後、佛念の傳語・慧嵩の筆受によつて譯出が完成したのである。阿含の教學に接した道安は

①四行中、阿含は數の藏府なり、阿毘曇は數の苑藪なり

と記してゐる。これは八九卽ち七十二歳に至つて九品四十六葉の②四阿鋡暮抄を得た道安のこの年に至つてこれを得たことを深く幸とすると共に恨みつつ數年を加へて韋篇三絶を記した感激のこもつた序文に呼應するものである。彼が七

十二歳にしてこの二阿含を知つた喜びは察するに餘りがある。然もこの四阿鋡暮抄は因提麗③（Indra）といふ外國沙門が、車師前部國卽ち現今の新彊省吐魯番縣附近に至り、其の王彌第の求めによつて誦出した胡本に基くものであることを知るとき、道安の晩年に於てシナ佛教界に於ける佛教學的な教養がやうやくこの程度まで擴大せられ來つたと考へることが出來る。

曇摩難提の傳へた經典は五部百十四卷に達するのであるが、現存するものはそのうち阿育王息壤目因緣經の一部一卷のみである。かくの如くして前秦及び後秦の教學に大きな波紋を與へた曇摩難提は所期④の目的を達したと判斷したのであろうか、後に西域に還り、その最後は判然せない。彼の活躍は建初六年（AD三九一）まで考へられるから、在秦八年間は政治的な動亂の中に終始した事になる。はじめは符堅から、次いでは姚萇から受けたであろう給與もさる事ながら、彼の關中に於ける生活の困窮も西域に歸る決意をそそつた事と思はれる。

註　①　十法句義經序　出三藏記集卷十所收　大五五、頁七〇上

②　四阿鋡暮抄序は未詳作者である。（出三藏記集卷九所收、大五五、頁六四下）。しかしこれは文體より判斷して道安撰と認定出來るほかに、本文中に四阿鋡暮抄の譯された年である壬午（AD三八二）を七十二歳となすことは、道安撰鞞婆沙序（出三藏記集卷十所收、大五五、頁七三下）に建元十九年（AD三八二）を以て八九の年となすに一致するを以て、道安撰と認定出來る。

③　四阿鋡暮抄序（出三藏記集卷九所收）大五五、頁六四下

④　常に謂ふ「弘法の體は宜しく未聞に宣布すべし」と。故に流沙を冒し、寶を懷きて東入す。

出三藏記集卷十三、曇摩難提傳　大五五、頁九九中

開元釋教錄卷三、大五五、頁五一一中

梁高僧傳卷一、曇摩難提傳　大五十、頁三二八中　など

五

僧伽跋澄（Saṁgha-bhūti）は衆現と譯される。〇賓の人で毘曇の學者であつた樣である。彼は建元の末ごろ禪數の學が盛行してゐた關中に來たのである。其處で彼は符堅の秘書郎の役にあつた趙政（字は文業）の祟敬をうけた。このごろの前秦の治下に於ては、「大乘の經典が未だ廣まつてゐなかつたが禪數の學が甚だ盛んであつた」[1]と云はれる。この時代の罽賓は犍馱羅即ち現今の Peshawar を中心とせるカブール河（Kabul R.）流域に生活した塞民族の國を稱するものであるから、彼の傳へた毘曇は、それ故にガンダーラ系の阿毘達磨であることが知られる。

彼は建元十九年（AD 三八三）四月—八月末の五ケ月を要して鞞婆沙論十四卷を譯出してゐる。その翌年に尊婆須蜜菩薩所集論十卷、僧伽羅刹所集經三卷を譯してゐる。このうち鞞婆沙論は曇摩難提が跋澄の諷誦をうけて梵文と爲し、佛圖羅刹が譯傳し、敏智が筆受したと見えてゐる。[2]これに反して他の二については竺佛念が傳譯し、慧嵩が筆受したことが知られる。[3]特に尊婆須蜜菩薩所集論に於ては、その譯出原本の作製は僧伽跋澄・曇摩難提・僧伽提婆の三人が共同して當つた樣である。このうち曇摩難提は兜佉勒國人である外は罽賓即ちガンダーラ系の教養を受けた人である。この頃のガンダーラには彌勒信仰が行はれてゐた事を察せしめる。そして僧伽羅刹を以て賢劫第八佛と爲してゐる事は、また道安の兜率往生信仰と合せて、ガンダーラに於ける佛教信仰の一分を傳へるものと云ふ事が出來る。

註 ① 開元錄卷三 大五五、頁五一一上

② 鞞婆沙序 道安撰（出三藏記集卷十所收）大五五、頁七三下

③ 婆須蜜集序 未詳作者なるも恐らくは道安の撰と認められるもの（出三藏記集卷十所收）大五五、頁七一下—七二上に次の如く出す。

罽賓の沙門僧伽跋澄、秦の建元二十年（AD三八四）を以て、此の經一部を傳へ、來りて長安に詣る。武威の太守趙政〔字は〕文業は、學んで厭かざるの士なり。求めて之を出ださしめ、佛念譯傳し、〔僧伽〕跋澄・〔曇摩〕難陀・〔僧伽〕禘婆の三人、胡本を執り、慧嵩筆受す。

六

佛圖羅刹（Buddha-raksa）は佛護と譯される。彼については望月佛教辭典にも闕說するところは無い。建元十八年（AD三八二）長安に於て摩訶鉢羅若波羅蜜經抄と道安によつて名けられた經典が譯出されたが、彼はこの經典の譯場に於て譯主となつてゐる。この經典は車師前部王彌第によつて献上されたものであるが印度のテキストの形式にならつて首題を有してゐなかつた爲に①長安品或は②須菩提品と名けられてゐた。これに對して道安は③はじめて摩訶鉢羅若波羅蜜經抄と名けたと云はれる。佛圖羅刹はこの譯場に於て、道安に多くの知慧を授けてゐると思はれる點が、この經抄序に見うけられる。

また建元二十年（AD三八四）罽賓の比丘なる僧伽跋澄が長安の石羊寺に於て口誦した④僧伽羅刹集經後記に

毘婆沙（卽ち佛陀耶舍）及び佛圖羅刹の翻譯せるも秦言未だ精しからず

とある。また八犍度阿毘曇根犍度後別記によれば秦元十五年（AD三九〇）五月十九日揚州瓦官寺に在ることが知られる。

また⑥僧伽跋澄傳によれば、彼の鞞婆沙論譯出に際して

跋澄は口に經本を誦し、外國の沙門曇摩難提筆受して胡文と爲し、佛圖羅刹宣譯し、秦の沙門智敏筆受して漢文となし、僞〔秦〕建元十九年（AD三八三）を以て譯出す。孟夏より仲秋に至りて方に〔その譯を〕訖れり

と出てゐる。

また⑦四阿鋡暮抄序によれば

余（道安）、壬午（AD三八二）の歳八月を以て、東して先師（佛圖澄）の寺廟を省し、鄴寺に於て鳩摩羅佛提をして胡本を執らしめ、佛念・佛護、譯を爲し、僧導・曇究・僧叡筆受し、冬十一月に至りて乃ち訖れり。

と出る佛護は佛圖羅刹のことである。

かかる資料を以てすれば、佛圖羅刹はやはりガンダーラ派阿毘達磨に通じた學人の一人であつてAD三八〇—三九〇年頃に於て、シナ佛教教學に阿毘達磨を、移植する爲に献身した人の一人であると見ることが出來る。

註 ① 出三藏記集卷二　大五五、頁一〇中。大唐內典錄卷三、大五五、頁二五〇上

② 開元釋教錄卷四　大五五、頁五一一上

③ 摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序（出三藏記集卷八所收）大五五、頁五二下

④ 出三藏記集卷十　大五五、頁七一中

⑤ 出三藏記集卷十四　佛陀耶舍傳　大五五、頁一〇二下

舍は人と爲り髭赤く善く毘婆沙を解す。故に時人號して赤髭毘婆沙と云へり。既に羅什の師たれば亦大毘婆沙とも稱せり。

⑥ 出三藏記集卷十三　大五五、頁九九上—中

梁高僧傳卷一　大五〇、頁三二八中

⑦ 出三藏記集卷九所收　大正五五、頁六四下

七

僧伽提婆（Saṅgha-deva）は衆天と譯される。罽賓の人である。建元十九年（AD三八三）長安に來遊し、關中の亂聖

に困苦をなめつつ晩年の道安と交りて譯經に從事、法和と俱に洛陽に於て先出の衆經を改定したのである。この後姚興關中に立つに及び法和は入關したのであるが、彼は慧遠の請に應じて南遷し泰元十六年（AD三九一）廬山に在りて慧遠の爲に般若臺に於ける譯經に從事してゐる。彼はやはり關中を去つて江南に到つた佛圖羅刹などと共に揚州瓦官寺に於て①長安以來の譯業を繼續したと見る事が出來る。また彼は隆安末年（元年AD三九七）冬に建康に於て衛軍將軍東亭侯王珣の支持を得て、慧持等の四十沙門を集め譯經に努力した。彼の最後については傳へられてゐない。

その譯出の經論は②出三藏記集卷二には

中阿鋡經六十卷、　阿毘曇八犍度二十卷、　阿毘曇心十六卷、　鞞婆沙阿毘曇十四卷、　阿毘曇心四卷、

三法度二卷の六部百十六卷

③大唐內典錄卷三に出す前後二秦傳譯佛經錄には

阿毘曇八犍度三十卷、　阿毘曇心十六卷、　毘婆沙毘曇十四卷の三部六十卷

④大唐內典錄卷三に出す東晉朝傳譯佛經錄には

中阿含經六十卷、增一阿含五十卷、阿毘曇心四卷、三法度論二卷、敎授比丘尼法の五部百十七卷、

合計八部百七十七卷としてゐる。

⑤開元釋敎錄卷三には

阿毘曇八犍度論三十卷、阿毘曇心十六卷の二部四十六卷を

⑥又それに續いて晉錄に出づるところを引いて

中阿鋡經五十九卷、增一阿鋡經五十卷、三法度論二卷、僧伽羅刹集二卷、阿育王息壤目因緣經一卷の五部百十四卷、

合計七部百六十卷としてゐる。

また衆經目錄卷五には、⑦舊錄に記載せられてゐて既に散逸して現存せぬうちに

⑧阿毘曇心論十六卷、阿毘曇心論五卷、三法度論三卷を數へ、また

小乘論單本のうちに

⑨阿毘曇論三十卷、毘婆沙阿毘曇十四卷の二部四十四卷を、

小乘經單本のうちに

中阿含經六十卷を擧げてゐる。

かくの如く僧伽提婆の業績については出没がある譯であるけれども、彼の譯業は二期に分けて考へる事が出來る。即ち第一期は長安・洛陽に於ける八犍度論三十卷・⑩鞞婆沙論十四卷・阿毘曇心十六卷など三部六十卷の阿毘達磨論書で符秦世錄に出されるものである。第二期は建康・廬山に於ける阿毘曇心論四卷・三法度論二卷・增一阿含經五十卷・中阿含經六十卷・教授比丘尼法一卷など五部百十七卷で東晉錄に出されたものである。

このうち三法度論は、さきに鳩摩羅佛提によつて譯出された四阿含暮抄經と同一であり、また四十二品の鞞婆沙論十四卷、四十四品の八犍度論などと合して⑫ガンダーラ派阿毘達磨の學人活動のあとを察する事が出來る。まこと彼は一三藏に兼通し誦持する所多く、尤も阿毘曇心を善くして其の纖旨に洞かりき」といふ傳評の辭に相應しい活動をなしたと云ふ事が出來る。

註　①　隆安末年春建康に遊ぶ。晉朝の王公と風流の名士、席を造らざるなし。冬に至り衞軍將軍なる東亭侯王珣の爲に重ねて中增阿含等を出す。京都の名德釋慧持等四十沙門を集め詳に翻譯を共にす。來の夏方に訖る。大唐內典錄卷三、大五五、頁二四六下、歷代三寶紀卷七、大四九、頁七〇下

②　出三藏記集　大五五、頁一〇下

③ 大五五、頁二五〇中、下
④ 大五五、頁二四六中、下
⑤ 大五五、頁五一一上、中
⑥ 大五五、頁五一一中
⑦ 大五五、頁一七七下—一七八上
⑧ 衆經目錄卷一、大五五、頁一五五下
⑨ 衆經目錄卷一、大五五、頁一五四上
⑩ 歷代三寶紀卷八、大四九、頁七六上
⑪ 歷代三寶紀卷七、大四九、頁七〇下
⑫ 出三藏記集卷十三、僧伽提婆傳、大五五、頁九九下
梁高僧傳卷一、僧伽提婆傳、大五〇、頁三二八下

あとがき

以上各項に亘つて特に詳論せんとしたものは、①歷代三寶紀卷八に引用する符姚世錄に出すところの符秦の列名である曇摩持・釋慧常・曇摩蟀・鳩摩羅佛提・曇摩難提・僧伽跋澄・僧伽提婆・釋道安の八名のうち漢土の人である慧常・道安の二人を除いた六人に、佛圖羅刹を補つた七名について述べた譯である。もとより道安並に竺佛念を除いては考へられぬものであるけれども、今は前秦に於ける外來阿毘達磨學人の業績を一瞥した次第である。

——一九五二・一二・八改稿・加筆——

註 ① 大四九、頁七五中

本論文は文部省大學學術局「科學研究費補助」による研究（西藏文施設論の飜譯及びその研究）の研究成果の一部である。